2016 夏学京都集会　自主講座のご案内

声楽家　　青野　浩美さんの歌とトーク

「前例がなければつくればいい。私は夢をあきらめない！」
～気管切開をした声楽家の挑戦～

日　時　2016年7月30日（土）16：15～17：30
会　場　京都教育文化センター　103

【プロフィール】

声楽家。京都市在住。

声楽家を目指し、同志社女子大在学中の４年生の冬、原因不明の神経性難病を発症。

手足が動かず、加えて無呼吸の発作にもおそわれる。リハビリと車いすの生活がスタートするが、度々の無呼吸発作に対応するため、医師からは「気管切開」を勧められる。喉に穴を開けることは声が出なくなることであり、声楽家としては致命的な決断であったが、命を守るためにやむなく気管切開に踏み切る。スピーチカニューレをつけての歌手としての活動は、「前例がないから無理」と医師から告げられるが、「絶対にあきらめたくない。前例がないなら私がつくる！」と決意し、いくつものスピーチカニューレを試し、試行錯誤の末、発病前と同じ音質、音量で歌うことができるようになった。

「スピーチカニューレ」について

気管切開した人が、発声するために気管に入れる管のこと。ただし、「自発呼吸ができる」「声帯に疾患がない」など、様々な条件をクリアしなければ、スピーチカニューレを使い声を出すことはできない。

また、スピーチカニューレ自体も、様々な形状や大きさなどがあるため、自分に合うものでなければ、声を出すことも難しいと言われている。

青野さんにとって歌うことは生きることそのもの。「私より上手な声楽家はたくさんいる。でも、病気や障害という本来ならしなくてもいい経験から伝えられることがあるはず」と、車いすでステージに上り、思いを込めた透き通る歌声とトークで、夢を追いかけることのすばらしさを全国に届けている。

関西人らしい笑いを交えたトーク、からだの中から響いてくる澄んだ歌声、合間に見せるほっこりとしたやさしい笑顔。それが青野さんのコンサートの魅力。

少しの支援と理解があれば、気管切開をしていても、呼吸器を着けていても、吸引などの医療的ケアがあっても、社会で普通に生活できることを、自身の体験を交えて訴えています。

病気になってはじめて見えてきたものもあったと、常に前向き。彼女の芯の強さが表れています。穏やかで、笑いの絶えないトークの中で、さりげなく、でも信念を持って、夢をあきらめずに生きることのすばらしさを語ってくれます。

どんなに困難な状況でも、常識を覆しても夢を成し遂げようとする粘り強さを子どもたちには持って欲しい。そのことを伝えていく力を彼女のコンサートから学びたいと思います。

参加協力金（一般参加の場合）　500円